

亀井孝「ツル」と「イト」を読み

村山七郎

比較言語学者が日本語を比較研究する場合に、ある日本語単語と、日本語以外の言語のそれとや音韻的、意味的に似かよった単語とを比較して、深い証明材料もななく、両者を同一のものとみなす傾きがまま見られることは一般に知られている。殊に、外国の日本語研究者には、日本語の歴史にうといたため、この傾きが見うけられるところであり、このことは、国語学者の間にも、日本語の比較的研究に対する不信を植えつける一因となるのではあるまいかと私はおそれる。

『ツル』と『イト』と題する亀井孝の論文（国語学、第十六輯）はかかる傾きに対する一つの警告の意図を以て書かれたらしいことは「日本語の系統の問題を考える上の参考として」という副題からもくみとることができるようである。

日本語ツルが朝鮮語 *turum* 「鶴」と酷

似していることは広く知られている。日本語、朝鮮語、及びトルコ語 *tuna* 「鶴」などから、原始アルタイ語における「鶴」を表はす語が **turn* に似かよったものと考へ日本語の *turu* が原始アルタイ語の直系と見ることが可能であるかどうか、これを亀井の問題とするところである。

そもそもツルという言葉が万葉時代に存在していたことは確かなことである。それは例えば、

山辺乃御井乎見我利神風乃伊勢処女等
相見鶴鴨（万—三〇）においてツルという活用語尾に「鶴」という字を用いているところからわかる。（万葉集総索引にはこの種の例が53あげられている。）ツルということばが万葉ガナでは一例も表はされていないのは注目される。

「鶴」を表はすもう一つのことば、タヅは万葉ガナでも書き表わされている。（多豆11例、多津1例、多都1例、多頭8例、

計21例。）次に万葉で「鶴」とのみ書かれていたときは普通にはタヅとよまれている。「鶴」が果して凡ゆる場合にタヅとのみよまれたかは確実でないであろうが、タヅとよまれたことのあることは、タヅキということばを表わすために「鶴寸」と書かれてることから示される。（万—八ウ）

亀井が次のように結論するとき、恐らくそれは正しいと認められるであろう。

「奈良時代に(I)タヅとツルとは共につるをあらわす語として存在していた、(II)しかし平安時代以後と同じく、タヅは歌語で、ツルは俗語であったのである。」（五頁、六頁）
それではその何れが古いか、そして何時頃発生したかという問題を解決するための手がかりとしてカヘル *kaheru*（亀井の転写による）とカハツ *katatu*（同）の成立の問題がとりあげられる。

「蛙」を表はすことばとしては万葉では、カハツのみが見られ（川津9例、河豆1例、河津4例、更に河蝦3例）カヘルは出ない。ではカヘルということばは無かつたかという点、カヘルデということばを表はすために「蝦手」を用いていることから（万八一—オ）存在したことが証明され、そ

して和可加敏流兵(万十四)によってカヘル
のへが甲類であることが知られる。

カハツのみが万葉に用いられるところを
見るとカハツはタツと同じように雅語、カ
ヘルはツルと同じように俗語ということに
なる。

では雅語と俗語とはどちらが古いかと言
えば、前者であるとされる。その理由。

「共時論的な雅俗の価値意識は、多くのば
あひ、無意識な記憶の伝承としての、語の
新古に対する通時論的な意識の投影であ
る。」(八頁)

さてカハツとカヘルのうちカハツは雅語
であつて、カヘルより古いと考えられるが
古いとしてもさほど古いことばでないこと
は、合成語タニグク(蝦蟇。多爾具久。谷
一蟻)のうちに化石的に残るククが存在に
よつて示されるとされる。「蛙」を表わす
古いことばはククであり、カハツ(カを
ふくむ形)は奈良時代より余り遠くない時
代にできたことばで、カヘル(カをふく
む形)は(俗語であるところから見て)も
つと新しい時代のものである。

さて、カをふくむカハツから、カをふく
むカヘルが発達したのと平行してタツ(カ

をふくむ)からツル(カをふくむ)が発
達したのであるとされる。だからツルと
いうことばの発生は余り古くない時代にお
いて行われたのであり(カハツ段階ではそ
れは未だ存在していなかった)、「日本語ツ
ルの形は(か)りに、朝鮮語の形はどうあら
うと)日本語がアルタイ諸語と直接の接触
を失つてのちの、はるかにあたらしいもの
であるべきはいふまでもない。……ツルと
いふ形にふくまれてゐるカは、原始アルタ
イ語から日本語への直系の子孫ではない。」
(九頁)これは軽々しい比較に対する重大な
警告のように見える。

しかしこのような議論は幾つかの疑問を
いだかせる。共時論的な雅俗の価値意識
が、無意識な記憶の伝承としての、語の新
古に対する通時論的な意識の投影であるの
は「多くのばあひ」であるにすぎない。この
ことは、同一概念を表はす雅語形と俗語形
とが時間的排列において前後に立たねばな
らないという必然性を少しも意味しない。

たとえ、雅語としてのカハツおよびタツ
が俗語としてのカヘルおよびツルよりも古
いということが承認されたとしても、一方
が他方から(母音間カヘルへの転化に

よつて)派生したことは如何にして証明で
きるのであろうか。

一方は *kafadu* (**kafianu* ~ **kafenu*) であ
る(ついでながらカハツを *kahadu* と転写
することに私は賛成できない。日本語の語
中の濁音の子音は(1)日本の諸方言資料によ
り、(2)室町時代の外国人の日本語記録によ
り、(3)奈良時代における (*kami-sasi* >
kam-sasi) *kāzasi* の如き単語により、ま
た(4)アルタイ諸語との比較により、直前に
鼻母音をもつていたと推定され、この鼻母
音は母音 *prasm, n, ŋ* にさかのぼると推
定される。そして *m, n, ŋ* に続く子音は清
音又は濁音であつたと推定される。)カハツ
のカハは「河」であるように見える。これ
はカへ (*kafē* (**kafia* ~ **kafē*) とは恐らく
関係がなす。 *kani* (三の瀬のカヒ) + *adu*)
kahadu (十七頁) は不可能でないとしても、
そこからカヘルの発達は如何にして証明し
うるか(カへまでは説明が可能でも、ルの
説明はどうするであらうか)。奈良時代を
去ること余り遠くない時代に同一言語共同
体において、母音間カヘルがカヘルに転化した
ことが多くの例によつて(しかもカヘルをふ

くむ形が雅語において、*くむ* をふくむ形が俗語において)実証されるのでなければ、龜井説は承認され得ない。

現在までの資料では、カヘ(甲類)ルとカハヅとは、起源を異にする別語と考えた方が無難のようである。同一語から出たことが確実でない二つの語について「*くむ*」をふくむ形は古い、*く* をふくむ形は新しい」などと言うことは学問的には大して意味がないように思われる。従ってツル (*turu*) とタヅ (*tadu*(**tan-tu*)) についての議論も、またその議論を根拠として原始アルタイ語と日本語ツルとの直接的関連を否定しようとする結論も、深い確実な論拠に基いてゐるわけではないと言ふことができるであらう。私はツルということばを「日本語系統論のための比較語彙から」除く必要はないと考える者の一人である。

日本語 *turu*、ツングース北方グループ *turya*、(ソウヴァジョの後掲資料によればヤクート語においても同形)、朝鮮語 *turuni*、トルコ語 *turra*、ハルハ蒙古語 *turgu*、ブリヤート蒙古語 *Turjan* から、アルタイ基本語における「鶴」を表はす一つの言葉 **turu* ~ **turgu* があつたこと

が推定される。

ツングース語について言えば *turya* は南方グループには実証されないから、ツングース基本語にそれがあつたと断定できないが、その可能性はある。いまツングース基本語にそれがあつたと仮定すれば、それに対応する古代日本語の形は *turu* である。なぜなら、ツングース基本語と古代日本語との間には次のような音韻対応が見られるからである。

ツングース基本語 語頭 第一音節 *u* 第二音節 *r*
古田博士 *u r*

ついでながら、「鶴」を表わすワラル・アルタイ系諸語のことは *A Sauvageot. Recherches sur le vocabulaire des langues ouralo-altaïques. Paris, 1930 p. 67* に「また朝鮮語 *turuni* とツングース、蒙古語との比較は *N. Poppe, HJAS, Vol 13, No 34 (Dec. 1950), p. 580* (ラムステット、朝鮮語語源研究書評)にもふれられてゐることをあげておきた。

次に朝鮮語 *sil* 「絲」と日本語イトとの関係を取扱った部分では、朝鮮語 *s*、日本語 *se* について簡単にのべられており、日本語 *イネ* → *シーネ*、*アメ* → *サメ*、*ウウ* →

「スウ」*ウツ* → *スツ*、*エ*(兄) ↓ *セ* の如き例におけるサ行音のあるなしについて「サ行音の現れない形の方を、サ行音の脱落したものと考え」とのべられるが、証明の試みがなされていないのは残念である。我々は著者の意見に早く接したいと思つてゐる。*アメ* → *サメ* と *エ*(兄) ↓ *セ* とは同一に取扱えないのではあるまいか。何故なら *エ*(兄) は *ye* であるから。

次に朝鮮語 *pal*: 日本語 *ハ* の式が出され、*イ* の例として朝鮮語 *pal*: 日本語 *hai* < *hali* があげられているのは適切であると思ふが、母音の相違については適当でないのは残念である。私は *pal* < **pari* < **pati* の如き発達を考える。第二音節の狭い母音 *i* の影響のもとに *a* < *o* の変化が生じたと解される。(即ち *i* ウムラウト) このような *i* ウムラウトは次の比較資料にも見られるであらう。

朝鮮語

日本語 *kati* < **kali* 「徒歩」 *karim* < **kalin*

kani < **kani* 「蟹」 *koi* < **kani*

—— 順天堂大学教授 ——